

087 手を洗う、清めに関する論争

マルコによる福音書 7 : 1~23、マタイによる福音書 15 : 1~20

マルコによる福音書 7 : 1~23

01 ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちが、(イエスを問い詰め、罣にかけるために) エルサレムから来て、イエスのもと (カファルナウム) に集まった。

→イエスの教えと奇跡は、エルサレムのユダヤ教指導者たちの注意を引いた。彼らは自発的にイエスの話を聞くために出かけて来た。ファリサイ派は律法を守ること、特に安息日や宗教的な清めを強調し、民衆に対して影響力があった。律法とその言い伝えを筆記する仕事に従事する律法学者の多くはファリサイ派に属していた。

02 そして、イエスの弟子たちの中に汚れた手、つまり洗わない手で食事をする者がいるのを見た。

→汚れた手：「けがれた」であって、「よごれた」ではない。律法によると、食前に不浄なものに触れた場合、その汚れた手で触れた食物も宗教儀式上、不浄とされた。従って、ユダヤ人は食前の手洗いの徹底を義務付けた。

03——ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝え (である口伝律法、ミシュナ) を固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食事をせず、04 また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台 (、敷き布団) を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある。

→念入りに：ギリシア語直訳は「握りこぶしで」あるいは「肘まで」洗う意味である。または、握りこぶしでもって他方の手の窪みを洗う意味にも取れる。

→市場 (いちば) から帰ったときには、伝統的なユダヤ教の教えでは、市場で購入した全てのもの、不浄なものとの接触によって汚されたものを、洗わなくてはならなかった。例えば、皿が不浄なものに触れると、皿の上の食べ物も不浄とされた。

→清めの儀式は、BC1 世紀に、ユダヤ教の指導的律法学者が創設したシャマイ学派とその対立派のヒレル学派によって体系化された。

——05 そこで、ファリサイ派の人々と律法学者たちが尋ねた。

「**なぜ、あなたの弟子たちは昔の人の言い伝え (である口伝律法に) に従って歩まず、汚れた手で食事をするのですか (弟子たちの罪は、先生であるあなたの罪です)。**」

06 イエスは言われた。

「(ユダの預言者) **イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわたしを敬うが、／その心はわたしから遠く離れている。07 人間の戒めを教えとしておしえ、／むなしくわたしをあがめている。』** (→イザヤ書 29 : 13)

08 **あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを (上に置き) 固く守っている。**」

→イザヤ書 29 : 13 主は言われた。「この民は、口でわたしに近づき／唇でわたしを敬うが／心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れ敬うとしても／それは人間の戒めを覚え込んだからだ。

09 更に、イエスは言われた。

「**あなたたちは自分の言い伝えを大事にして、よくも神の掟をないがしろにしたものである。10 モーセは、『父と母を敬え』**と言い、『父または母をののしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っている。

→ないがしろ (蔑ろ)：あってもないかのように侮り軽んずるさま。

→十戒 (=DEKALOG:ギリシア語→deka[10]+logos[み言葉]) の第五戒

・出エジプト記 20 : 1~17 黒文字：新共同訳 青文字：聖書協会共同訳

・申命記 5:1~21 緑文字：新共同訳 茶文字：聖書協会共同訳

12⑤あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。

12⑤あなたの父と母を敬いなさい。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えてくださった土地で長く生きることができる。

16⑤あなたの父母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生き、幸いを得る。

16 あなたの神、主が命じられたとおりに、⑤あなたの父と母を敬いなさい。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えてくださった土地で長く生き、幸せになることができる。

→子には両親の世話をし、尊敬することが期待された（レビ記 19:3、20:9、申命記 27:14~26）。この命令には祝福の約束が明記されている。

→マタイ 15:4、19:19、マルコ 7:10、10:19、ルカ 18:20、エフェソ 6:2

11 それなのに、あなたたちは言っている。『もし、だれかが父または母に対して、「あなたに差し上げるべきものは、何でもコルバン Korbān、つまり神への供え物です」と言えば、12 その人はもはや父または母に対して何もしないで済むのだ』と。13 こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている。また、これと同じようなことをたくさん行っている。』

→コルバン Korbān

レビ記 1:2 イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。あなたたちのうちのだれかが、家畜の献げ物 [コルバン—Korbān] を主にささげるときは、牛、または羊を献げ物としなさい。

14 それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。

「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。15 外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

16<底本に節が欠けている個所の異本による訳文>聞く耳のある者は聞きなさい。 †

17 イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。

18 イエスは言われた。

「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。 19 それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。」

→（リビング・バイブル）イエスはお答えになりました。「あなたがたまでわからないのですか。食べ物は人を汚さないということが、そんなに不思議なのですか。19 いいですか。食べ物は人の心に入るわけではないでしょう。腹に入って、外へ出るだけではありませんか。」イエスは、あらゆる食べ物がきよいものであることを示し、

→イエスを信じた者は、旧約聖書の食物規定から自由にされる。 <Freedom in Christ>

→使徒言行録 10:10~16→新約時代は、ユダヤ人も異邦人も信仰と恵みによって救われる時代である。彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。

そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。

しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は一つ食べたことがありません。」

すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」

こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。

20 更に、次のように言われた。

「人から出て来るものこそ、人を汚す。 21 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。 ①みだらな行い、②盗み、③殺意、22④姦淫、⑤貪欲、⑥悪意、⑦詐欺、⑧好色、⑨ねたみ、⑩悪口、⑪傲慢、⑫無分別など、

23 これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

→人間の内側にある「悪い思い」が言葉や行動（行為）となって表れて来る。

【参考】新約聖書にある「手を洗う」に関する聖句

		聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 4 / 聖句等の総数 33250]	
S マタイによる福音書	15:2 「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません。」	
S マタイによる福音書	15:20 これが人を汚す。しかし、手を洗わずに食事をして、そのことは人を汚すものではない。」	
S マタイによる福音書	27:24 ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなのを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」	
S マルコによる福音書	7:3 ——ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないで食事せず、	

【参考】タルムード (Talmud、「研究」の意)

1. ユダヤ教の伝承によれば、神はモーセに対し、書かれたトーラーとは異なる、口伝で語り継ぐべき律法をも与えたとされる。これが口伝律法（口伝のトーラー）である。6部構成、63編から成り、ラビの教えを中心とした現代のユダヤ教の主要教派の多くが聖典として認めており、ユダヤ教徒の生活・信仰の基となっている。ただし、聖典として認められるのはあくまでヘブライ語で記述されたもののみであり、他の言語に翻訳されたものについては意味を正確に伝えていない可能性があるとして聖典とはみなされない。

2. 歴史的には、AD1世紀、口伝律法はモーセの律法以上のものと見なされ、「我が子よ、モーセの律法よりも、ラビたちの言葉により注意を払いなさい」「聖書を学ぶことは、良くも悪くもない。しかし、ミシュナを学ぶことは良い習慣であり、神からの報酬をもたらす」とまで言われた。

「ミシュナ」とは、2世紀末、ユダヤ人共同体の長、ユダ・ハナシー（ハナシーは称号）が、ラビたちを召集、口伝律法を書物として体系的にした文書群である。そして、このミシュナの詳細な解説が付されるようになると、その過程において、英語版のエルサレム・タルムード(またはパレスチナ・タルムード)、ヘブライ語版のバビロニア・タルムードと呼ばれる、内容の全く異なる2種類のタルムードが存在するようになる。現代においてタルムードとして認識されているものは後者のバビロニア・タルムードのことで、6世紀ごろには現在の形になったと考えられている。

3. 当初、タルムードと呼ばれていたのはミシュナに付け加えられた膨大な解説文のことであったが、この解説部分は後に「ゲマラ」と呼ばれるようになり、やがてタルムードという言葉はミシュナとゲマラを併せた全体のことを指す言葉として使用されるようになった。→タルムード＝ミシュナ＋ゲマラ

4. 「タルムードはユダヤ教徒の聖典である。」とされてきているが、タルムードの権威を認めないユダヤ教の宗派（カライ派、シャブタイ派など）も存在する。

【参考】ユダヤ教の四派(ファリサイ派、サドカイ派、熱心党、エッセネ派)

▶貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム (=ギリシア風) 文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教=ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書〈トーラー〉—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記—を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビrabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシム(パルシム)」=「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

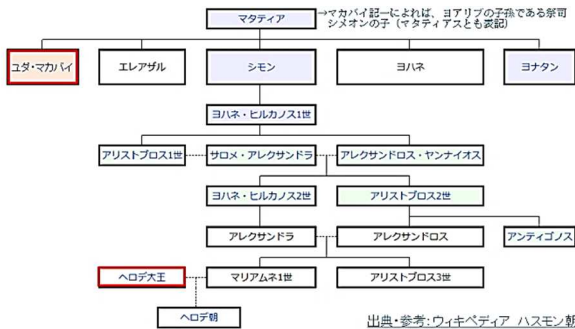
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1: BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。

▶富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム (=ギリシア風) 文化に対して柔軟

中間時代に誕生したサドカイ派は、その名を祭司の主流派、ツァドク(ザドク)に由来し(サムエル記下20:25、列王記上1:38~44)、神殿詣(神殿信仰)に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。

裕福な上流社会のユダヤ人(サムエル記下20:25、列王記上1:39~45)—祭司、教養のある金持ち、貴族階級に属する人々—でファリサイ派と対立した。彼らは、モーセ五書(トーラー)のみをファリサイ派のように多くのこじつけ議論等に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、政治的には既得権益を守るために親ローマであったため、一般大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力(神殿礼拝、神殿ビジネスの完全支配)があり、非常に影響力があった。

▶熱心党

ユダヤ戦争（帝政ローマ期の AD66 年から 73 年まで、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間で行われた戦争で、ユダヤ属州総督のローマ人フロルスがエルサレムの第二神殿の宝物（17 タラントン=17×6000 ドラクメ〈1 ドラクメ=1 日の日当〉/タラントン≒1 億円-の金）を奪ったことに端を発している）の時、反ローマの暴動の中核をなしたのは、熱心党 (Zealotry) と呼ばれる人たちであった。ヘブライ語で「カーナイーム」、ギリシア語で「ゼーロタイ」（熱心な人々）という。

ローマはユダヤを直接支配下に置き、徴税組織を整備するためとユダヤ人の財産を査定する目的で AD6 年（ルカによる福音書 2：2：キリニウスは AD6 年、シリアの総督になった）に住民登録（人口調査）を実施した（同 2：1）。これに対し、唯一の神のみを支配者とするユダヤ人が、ローマ皇帝に納税することは決して許されないと武力で反乱を起こしたのが熱心党であった。

熱心党は、教養というより、律法を守ることを優先し、それが侵された場合は武力で抵抗する考えを持つ教派であった。彼らは神より与えられた救済を考えていたが、この救済をもたらすためには神は人間の協力を頼りにしていると確信していた。勝利するためには暴力の使用を認め、戦いで命を失うことは神の名における聖者になるための殉教だとした。

熱心党運動のイデオロギー（思想傾向、社会等に対する考え方）は、ファリサイ派の中から生じた過激な行動理論であった。熱心党は、ユダ^{※2}を中心としたガリラヤ派と、ザドクを中心としたエルサレム派の二派があった。

特に熱心党の中で最も過激な暗殺者集団は、「ガリラヤの短剣党（シカリー派 Sicarii）」（四千人の暗殺者：使徒言行録 21：38）と呼ばれ、常に懐に短刀（シカ：ラテン語）を忍ばせ、反対派を暗殺した。

また、激烈な内部抗争もあり、各派閥間の関係も複雑であった。後、民衆の支持を受けた熱心党のゲリラ活動が激化、社会の秩序と治安は失われ、ユダヤは無政府状態に陥った。

熱心党の人々が暴力を正当化した根拠は、民数記 25：10～11 にあるとしている（歴史によればあまりに過激すぎるのでエルサレムを追放され、略奪や集団虐殺を繰り返して辺境地帯をさまよい、AD73 年の春、マサダの戦いで殲滅したとされている）。「ユダヤ戦記」および「ユダヤ古代史」の中で、著者フラウィウス・ヨセフスは、熱心党は過激すぎて、古代イスラエル王国を消滅させた元凶であると記している。

→民数記 25：10～11

主はモーセに仰せになった。「祭司アロンの孫で、エルアザルの子であるピネハスは、わたしがイスラエルの人々に抱く熱情と同じ熱情によって彼らに対するわたしの怒りを去らせた。それでわたしは、わたしの熱情をもってイスラエルの人々を絶ち滅ぼすことはしなかった。」

※2：その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こした（AD6）が、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた（使徒言行録 5：37）。

▶エッセネ派

エッセネ派（呼称の語源は不詳）は、ハスモン朝時代から墮落した祭司により行われていた、エルサレムの神殿での礼拝の否定にありました。ファリサイ派から発生したと考えられるが、俗世間から離れて自分たちだけの集団を作ることにより自らの宗教的清浄さを徹底しようとした点で、民衆の中で活動したファリサイ派とも一線を画している。「エッセネ派」という言葉は聖書には出てこない。このことから、洗礼者ヨハネやイエス・キリストが、エッセネ派に属していた、あるいは関係グループに属していたという説もある。